

今、古民家再生の先に見えるもの

長く長く使われている家があります。

何世代にも渡り一族が住み続け

大切に手入れされ、守られてきた家です。

本州に比べると歴史の浅い北海道でさえも

築年数100年を超えるものもあります。

これからまた100年先まで

住み続けられるようにと

その再生に力を入れる会社が

三笠市にあります。

この再生事業は、単に家を残すだけでなく

資源の循環や文化の伝承、

技術の保存といった眼に見えない

価値を多く含むものでした。

取材・文／名嘉真咲菜 撮影／高原 淳 デザイン／高山和行

古材ギャラリー

新築の注文を受ける場合、合わせて前の家の解体も請け負うことが多く、その構造材が古材だった場合には1本でも2本でも引き取り、ここに保存しているそうです。農家の納屋を移築再生したギャラリーの中には10年以上かけて集められた古材や建具がびっしり。右ページの写真はこの2階。



古民家再生の部分補充や、新築のアクセントとして使用する場合はここから選びます。ちなみに古材だからと言って素材としての強度には問題はありません。100年近く経った古材も表面を削れば新材と見分けがつかず、科学的に年代測定をすることでしか判断できないのだそうです。



見直されつつある古民家の価値

家の寿命は何年だと考えていますか？ 25年？ 30年？ 私たちが知る家のほとんどの寿命はそのくらいでしょう。例え新築した家でも次の世代に渡ることなく、寿命が来たら大型機械で無残に壊され、廃棄物にいつのまにか私たちは、人生で一番大きな買い物ですら使い捨てにしてしまっているようです。

一方で築何十年、百数十年の家があります。修繕を繰り返しながら、地域の気候風土に順応してきたそれらの家は一般的に「古民家」と呼ばれます。共通して、釘などの金物をいっさい使用しない木組みの構法、いわゆる日本古来の伝統木構法によって建てられたものがほとんどです。さらに北海道における事情を付け加えれば、今から約100年前は原生林を開墾していた頃。立派な広葉樹には事欠きませんでした。北海道の古民家は同時期の本州のものとは比べ物にならないくらい、良質な材木が構造材として贅沢に使用されているのだそうです。

古民家が戦前に建てられたものに対し、現代の短命な住宅は戦後のもの。この住宅文化の変化には住宅の商品化、家族の減少、自然環境に左右されない住環境を良しとする考え方や様々挙げられますが、戦後の高度経済成長の中で合理主義や効率性が重視されてきたことが全ての根底にあるようです。

でも、家はただ単に「住む場所」ではありません。「家族の歴史を詰め込む場所」でもあるのです。古民家はその役割をなるべく長く果たせるように進化してきた日本の宝とも呼べるものです。

昨今、古民家の価値を見直し、再生しようと奮闘している人たちがいます。今回ご紹介する三笠市の武部建設も北海道で古民家再生を手がける工務店のひとつです。どういう会社なのかは後述するとして、ひとまず武部建設による施工事例をご覧ください。



武部 豊樹さん

武部建設は、石川県出身の祖父が農業の傍ら冬山造林を始め、それを父が製材業、建設業へと発展させたそうです。3代目の武部さんは自ら現場にも出向く行動派。古民家再生を語らせると熱いです！



岩見沢市にある室水ワイナリー。2006年に完成した販売店兼醸造工場は古い木造倉庫を移築再生し、風土や景観になじむデザインとなりました。



木組みが美しく、つい何度も上を見上げてしまいます。基本的な構造はほぼ以前のままでそうです。



北海道で農業をやりたくて東京から移住してきたという中澤一行さん。消費者と直接つながる農業の面白さを実感する日々です。



写真左/床は元の位置よりも低くし空間を広くする工夫が施してあるそうです。ホゾ穴のところが以前の床位置。写真右/前の家主の子どもたちによるものでしょうか。身長を測った跡が残ります。

中澤邸(岩見沢市) 家主が変われど語り継がれる家

岩見沢市でワイン用のブドウの栽培農家を営む中澤一行さんが夫婦でこの家に住み始めたのは7年前。ブドウの栽培に適したこの土地で、新規就農するために家を新築しました。古民家を住宅にすることを決めるまでには紆余曲折あったのですが、事の発端は中澤さんが武部建設の古民家解体見学会に参加していたこと。「もし晴れてたら、行かなかったと思います。だけど、その日が雨だったんですよ。畑仕事もできないし、それなら行ってみるかっ」。その頃、家を建てる話はまだまだ具体化していなかったものの、以前よりワインつながりで武部さんと面識があったことや、武部建設の古民家再生の理念に賛同していたこともあって、中澤さんは見学会へ出かけたのでした。後日、目の前で解体される家がまさか自分のものになるとは想像すらせずに。

ところで、まるでモデルハウス見学会さながらの「古民家解体見学会」とは、読んで字のごとしの武部建設のイベントです。新しい家主が決まらないまま解体されることも多いのですが、積んである材を前に「これがいかに素晴らしい家か」を顧客に説明したところで説得力に欠けてしまいます。どんな家が出来上がるのか想像もつきません。そこで、顧客や見込み顧客にできるだけ解体前の状態を知らせようと言うわけですね。もちろん、大工たちによる古民家解体の技を見てみたいという興味だけでも大歓迎です。

かくして見学会より1年後、いざ新築する家の設計が出来上がり、施工を武部建設に依頼しようかという段になった時でした。中澤さんの元に、武部さんから、「あの家を使って建てないか」と電話が入ったのは。「かなり迷いましたよ。設計も出来上がっていましたし。ただ、価値あるものが壊されているっていう危機

写真左/南側の窓から土間に差し込む太陽光がコンクリートに蓄熱され、家を温めます。新しく作った土間の天井には新材を使用。写真右/2階は構造材が見渡せる開放的な造りになっています。寝室は別一室。



なんと、この家が左ページ上の写真のようになりました！ 岩見沢の農家のものだったこの家は移築時にちょうど築100年を迎えたそうです。(写真提供/武部建設)





家の裏手に広がるのが中澤さんのブドウ畑。10月に収穫したブドウは本州のワイナリーへ輸送され、「KURISAWA BLANC(クリサワブラン)」として販売されます。中澤ヴィンヤードオリジナルの白ワインは全国のレストランなどへ出荷され、武部さんもそのファンの1人。

もちろん全ての来訪者には、この家が元は農家の民家であったことや、築100年以上であることが口伝えに語られることでしょう。「それってまるで、ストーリーが付いてまわるワインのようでしょ」とは、武部さんがボソッとつぶやいた言葉。レストランで産地や栽培者が語られる中澤さんのワインのごとく、家のストーリーもそうして語り継がれていくのでしょうか。

そうそう、以前の家主も親戚一同を引き連れて見に来てくれたとか。家の歴史を途切れさせないために、古民家再生において家主が変わる場合、武部さんは新旧の家主を引き合わせるようにしているそうです。

先の見学会で実際目にしていた物件だけに、人事としては聞き流せず、古民家の保存を願う者の代表としての責任すら感じてしまった中澤さん。夫婦二人で住むにはちよつと広すぎるのが難点だそうですが、来訪客が多くなったことは予想外の嬉しいことでした。

かつて、少し思ってますけど(笑)。

感の前からあって。その頃はまだ武部さんも実例があまりなかったし、だから自分が実践することで、後に続く人が出るんじゃないかって。そこまで考えなくても良かったのかもしれないけど、それが決断の一番の理由ですね。大きなものを背負っちゃいましたよね。今となつてはそこまで自分がやらなくてもよかつたんじゃないかって、少し思ってますけど(笑)。



ワインを通して知り合ったという二人。中澤さんは前々から「家を建てるなら武部さんに」と決めていました。



設計はやはり中澤さんが懸念にしていた、古民家再生の理念にも共感してくれる設計士にお願いしました。中澤さん曰く「夫婦二人暮らしには大きすぎる」テーブルも、空間の広さを考慮した設計士さんの配慮だそうです。





以前は南側に木が繁り日当たりが悪かったため、敷地内で30mほど移築しました。家があった位置は写真の中央。低木だった庭木も、100年経つとこんなに大きくなるんですね。



農業高校の教員だった斉藤信寛さんは斉藤家の8代目。今は畑仕事や地域の集まり、敷地内の整備に忙しく過ごしています。



斉藤邸は築106年。しかし「この柱だけはもっと以前のものだろう」と武部さん。つまり、106年前に既に再利用されていたということになります。

斉藤邸(厚真町) 先祖代々が生きた土地で蘇った本家

「死んだ祖父さんの遺言もあるけど、子どもたちに拠点というか、故郷をつくってあげたかったんですよ」。全道をあちこち転々としながら教員として働いていた斉藤信寛さんが退職後に終の住処として選んだのは、厚真町にある生家でした。平屋70坪の木造建ては斉藤家の4代目が建てたもの。斉藤さんだけでなく、父も祖父も生まれた家です。

家を残すことは自分が住むということ。そう固く決意した斉藤さんが求めた条件は2つありました。1つには「材料をそのまま使う」こと。そして「寒くない」家であること。実は、斉藤邸に限らず古民家の欠点として、特に北国で第一に挙げられるのは寒さです。多くが本州の様式のまま建てられた家は断熱効果に劣り、斉藤邸も「布団の襟が息で白くなるくらい」だったそうです。

いくつかの工務店を検討しながらもその寒さ対策の点で納得できずにいたところ、巡り合ったのが武部建設でした。「見た瞬間、この家は壊しちゃいけないと強く思いましたよ。こんな立派な家は新築で建てると言われても無理ですから」と、武部さん。代々住み続けてきた生家を現地で再生させたいという斉藤さんの思いにも強く共感し、工務店として蓄積してきた高断熱・高気密の技術と、古民家再生事業で得てきた技術を全力で注ぎ、見事に再生させたのでした。70坪を40坪に縮小してもなお開放的な空間に仕上がった室内ですが、もう寒さを感じることはほとんどないそうです。今ではお盆と正月には3人の子どもたちや分家の親戚がこの家に集まります。「これが例えば、札幌市内のマンションにでも暮らしていたら、ありえなかったと思うんです」と斉藤さん。100年が経った今でも、この梁の下で家族が集まっていることに、亡くなったお祖父さんもさぞ喜んでいることでしょう。



解体作業は冬の間に大工4~5人で行なわれました。バラした材は一度持ち帰り、磨いてから再度組み立てられます。(写真提供/武部建設)

写真左/リビングの天井にあった見事な梁! カツラの木だそうです。写真右/台所から御手洗に続く北側の廊下。南には広間、北側にはプライベートスペースを置き「ハレとケ」の文化に乗った造りになっていました。





写真左上/斉藤邸は設計も武部建設によるもの。和風の良き風合いが水田の広がるこの町にとても似合っています。写真左下/「とにかく暖かい家に」との斉藤さんの要望を叶えて高断熱・高気密に造られた家は冬の朝でも14℃以下になることはほとんどないそうです。もちろん水音としの必要もありません。リビングには暖かい陽射しが注ぎます。

現代社会で古民家を扱う覚悟

武部建設が本格的に古民家再生に取り組み始めたのは12年前でした。自分たちが丹精込めて建てた家が順々に寿命を迎える傍らで、数百年在り続ける家がある。それらの貴重な家や材が声もなく姿を消していく。大手ハウスメーカーとの価格競争に苛まれる市場。柱の1本1本を細くしてまでの低コスト追求の先にあるものはいったい何だろうか？ そもそも「家」とは何だろうか？ 古民家再生への道は、そうしたいくつもの問題に直面する中での一筋の光でした。

とは言っても、古民家に手を出すということは、乗り越えなければならぬ新たな課題も多すぎるほどあります。それは例えば、建築基準法の規制。現代の法律では、古民家をそのまま移築再生するのは確認申請が通りません。例えば、その家がこれまでに100年間あらゆる災害の前に揺るがなかったという事実があったとしてもです。確認申請を通すためには金物を使って補強をする、または非常に高度な構造計算書を提出しなければならぬそうです。伝統木構法や古民家より後にできた法律によって規制されることに疑問を感じつつも、今のところ無駄とも思えるような手間と労力を費やしてそれに従う他に術はありません。

また、古民家再生に適した国産材の確保も重要です。いくら頑丈な古民家と言えども、再生の際には土台など一部の構造材を補充・補強しなければなりません。武部建設では、10年以上かけて集めてきた古材ギャラリーのそれらが役に立っています。

そして人の手によって作られた古民家の再生において、要となるのはやはり人の手です。伝統木構法を扱える職人。要するに古民家を解体し組み立てられる腕のある大工がいること。これがなければ話は始まりません。

意識の高い大工が良い家を作る

武部建設には現在、74歳の大先輩から見習い実習中の若者まで14人の専属の大工がいます。たいてい2〜3人で班を組んでひとつの現場に通い詰め、1軒の家を仕上げるそうです。

実は古民家再生に取り組み以前から、武部建設では大工の育成に力を入れてきました。それは、より高断熱・高気密の住宅の追及と同義だったからです。

「いくら高度な設計や構造上の計算をしても、実際に作るのは大工ですから。会社の持っている技術を体現するのは彼らなんです。我々の仕事は現場に集約されます。例えば、断熱材をいかに丁寧に入れるにしても、その丁寧さっていうのはお金で買えるものではなくて、全ては1人ひとりの大工の意識の高さひとつなんです」。木造建築の現場の良し悪しは全て大工の腕にかかっていると、武部さんは断言します。これまでに、社内での独自の徒弟制度を模索したり、道内唯一の大工育成塾^(※)の受け入れ工務店として若い大工の育成に尽力してきました。伝統木構法に基づく技術を備え、それを現場で存分に発揮する高い意識を持つ大工たちが武部建設の自慢です。その彼らが、古民家再生という大仕事にも物怖じせずに挑みます。

ところで、当の大工たちは古民家という対象をどのように捉えているのでしょうか。武部建設の建築現場



武部建設の敷地内に仮組みされ、新しい家主を待つばかりの古民家。長沼に明治43年に建てられた福井県出身の開拓農民の民家です。構造材は解体する際に全て大工によって番付されます(写真下)。

写真左/岩本さんは中澤邸も担当した、大工歴40年のベテラン。「僕らの目にしてみれば、家は全部違うよ。細工ひとつにしても、親方の考え方や性格、個性が出てくるからね」。写真右/大澤さんは、武部建設で大工育成塾^(※)を修了した初めての塾生でした。その後も残り職人としての腕を磨いています。齊藤邸の再生にも携わりました。



2010年12月に建設中だったむかわ町の現場。実家の敷地内に新居を建てるといってお施主さんですが、かなり住まいにこだわる方であちこちの工務店を訪ね歩き、最後に辿り着いたのが武部建設だったそうです。

(※) 国土省が支援する一般社団法人。日本の伝統を継承する大工職人の次世代育成のための国家プロジェクト。塾生は全国4箇所の地域で行なわれる全体講義と各地の受入工務店での現場研修(3年間)を履修する。北海道の受け入れ工務店は武部建設のみ。
大工育成塾HP <http://www.daiku.or.jp/>



写真上／建設中のこの家でも居間の見えるところに古材が数本使用されていました(写真では紙に包まれています)。古材はこの敷地に以前建っていた納屋のもの。
写真下／建設現場がとてもきれいに整頓されていることにびっくり。現場には「現場キレイ推進」と「職人十箇条」の張り紙が。

左から武部さん、大工の岩本さんと大澤さん。作業中に少しお時間を拝借しての撮影にも快く応じてくれました。

を訪ね、岩本隆さんと大澤仁朗^{しろう}さんにお話を伺いました。二人ともこれまでに何度も、古民家の解体や再生に関わってきた大工です。

「新築というのは、1人の大工がゼロから始めるから、全部自分で決められるんですよ。でも古民家は所々既に決められているから、そこに合わせなくちゃいけない」。そう話すのは大工3年目の将来有望な大澤さんです。先述した斉藤邸解体の際には1年目の年でした。先輩方と一緒に現場入りしたものの、滅多にない好機に自分がまだ経験値の少ない時期だったことが少々悔しい様子です。

と言いますのも、この道40年の岩本さんによると、古民家を扱えるかどうかは大工としての経験によるところが大きいのだそうです。「古民家は、図面通りにいく新築と違ってピタッといかない部分がある。他の人が一度手がけているから、どう考えて作ったかを理解しないと。応用力が必要だね」。つまり、組み方一つから前の大工の意図を読み解くわけですが、それには経験で対応する他ないのでそうです。逆を言えば、腕の立つ大工さえいれば、古民家は何度でも再生できるということもあります。築100年の古民家を再生すれば、それはまた100年先まで在り続けるでしょう。「大変だけど、新築とは違った面白さもあって職人冥利に尽きるね」と、岩本さん。岩本さんや大澤さんの大工としての手仕事長く後世に残ります。

素材だけ残すのではなく、大工も残さなければ古民家は生き続けられません。「プライドが持てる仕事をしたい」と、武部さんは大工職人の社会的地位はもつと上であっていいはずだと言います。家を造るのは工務店であり建設会社ではありますが、実際に造りだすのは大工の両手に他ならないわけですから。



このモデルハウスは1998～2000年に手がけた古民家再生の1棟目。由仁の民家を移築し、武部建設がテーマに掲げる「モダンクラシック」な家に仕立てました。

そもそも「家」って何だろう？

古民家再生においてはNPO法人日本民家再生協会によって、斉藤邸のような現地再生、中澤邸の移築再生、部分再生、古材の使用、以上の4つに分けて優先順位が定められています。これまでに武部建設が現地再生や移築再生を行なったのは14棟。これは、全体の施工件数のおよそ5〜6パーセントだそうです。そして、4つの分類のうち最も施工例が多いのは古材の使用です。たいいていは、打ち合わせの段階で武部建設から提案し、受け入れるお客さんがほとんどだと言います。これだけ関心を集めつつある中でも、一軒まるごとの再生、特に斉藤邸のような依頼主が家主であることはまだまだ稀なケースなのです。

伝統木構法による古民家は、再利用されることを前提に建てられています。いつかは朽ちてしまう釘などが構造の組み立てには使われていないのも、そのためです。

しかし現在、残念ながら価値ある古民家の多くは、改装も解体もされぬまま持ち主に見放されてしまっているものがほとんどです。構造材は再利用されながら、大工の技術は継承されながら、そして家主の意思は子孫へと引き継がれながら。そうした一つひとつの循環による住文化が再び築かれることを願って止みません。

これだけ実績を積んできた武部建設ですら、会社経営の側面から見ると、古民家再生事業での利益は一部でしかありません。それどころか、新しい家主が見つからな

いままの保存のための古民家解体にかかる費用などは、通常の解体より割増分を全て負担することになります。

「古民家再生で食べていこうと思っているわけではな

いんです。そこから得られるものを自分たちの家づくり

の根幹に組み込もうとしている。つまり、古民家を通して

身につく大工の技術や伝統木構法の知識、日本の住文化

の知恵、家そのものの在り方、それらをこれから新築

する家はどう取り入れていくか。表面的には古民家かもしれ

ないけれど、中身は根源的な問題解決に向かっていると

思っています」と武部さん。古民家再生を通して得



られる、目に見えない価値。それは大工の意識と同様に、

武部建設株式会社
本社、古民家再生モデルハウス
三笠市萱野219
TEL.01267-2-2312

岩見沢事務所、結ホール
岩見沢市5条東18丁目31
TEL.0126-22-2202

モデルハウスや結ホール来訪希望の方は
お電話にてお問い合わせ下さい。
<http://www.tkb2000.co.jp/>



結ホール

自社のショールーム兼ギャラリーとして2006年にオープンしたホール。武部建設の古民家再生事業にまつわる資料なども閲覧できます。地域の文化交流の拠点にもなっており、年に数回コンサートなどのイベントが開催されます。

全て右ページモデルハウスの室内の様子。建設会社として蓄積してきた技術を惜しみなく注ぎ、北国の気候に対応した高い断熱性と気密性を実感することができます。

